保育者養成校でのピアノによる音楽表現指導の一考察
――音楽の三要素を基に――

A Study of the Music Expression's Instruction by Piano Performance at Childcare Worker Training School: Based on Music Three Elements

水野　沙織
Saori Mizuno

はじめに

これまでの研究から、保育者養成校の学生には音数が多い煌びやかな演奏がすぐれたピアノ伴奏であるとの認識が強くあるものの、歌詞分析を通じて表現の方向付けを行うことにより、各自の演奏レベルに応じた効果的な表現方法を模索する姿が見られるようになることが分かった。

本研究では、表現方法を模索し始めた学生が、音楽の三要素を基に楽曲を分析し、ピアノ演奏によって音楽表現を実践した授業内容とその成果を考察する。

授業の概要

授業名

ピアノ演習Ⅲ

授業の内容と目的

２年生後期に実施するピアノの演習授業。２年間のピアノ学習の総まとめとして、卒業後に保育者として演奏をするための基礎力の総仕上げをしながら、表現力についての関心を広げることを目的とする。

受講学生

卒業学年の２年生。入学時のアンケートでは56人中45人（全体の８割以上）が養成校入学前にピアノのレッスンを受けた経験がないと回答した。

課題

卒園式での歌伴奏を想定して、以下の課題曲１～３を全てメロディー譜で提示した。受講学生は

次項に示す楽曲理解の手順を経て最終的に３曲から１曲を選び、自身で左手伴奏譜を作成した上で演奏披露をすることとした。なお、前奏・間奏・後奏・繰り返し・歌唱の有無は各自の判断とした。

課題曲１　小さな世界（作詞・作曲：リチャード・シャーマン、ロバート・シャーマン、日本語詞：若谷和子）

課題曲２　君をのせて（作詞：宮崎駿、作曲：久石譲）

課題曲３　BELIEVE（作詞・作曲：杉本竜一）

到達目標　課題の到達目標は以下とした。

（１）　選択した楽曲の求める表現を理解する。

（２）（１）を表現するのにふさわしい左手伴奏譜を、自身の演奏レベルに応じて作成する。

（３）（２）で作成した楽譜をピアノで演奏し披露する。

（４）　聴き手（同じクラスの学生）と共に、音楽による「表現」を理解し味わう。

楽曲理解の進め方

授業では、音楽の三要素がメロディー、リズム、ハーモニーであることを学んだ上で、学生の理解が進みやすいメロディーの動きに着目して音楽表現の意図を読み取る方法を学んだ。なお、リズムでは左手伴奏時の刻みとアルペッジオによる印象の違い、三連符とシンコペーション、音価の変化の解説のみにとどめ、ハーモニーに関しては本授業では解説を割愛した。これらは、学生が音楽を解釈していくことを難解に感じないようにする配慮であり、専門的な見地では不十分な解説であったとしても、知識としての伝達は平易な表現で最小限にとどめることにした。

メロディーの学習

本授業で解説した、メロディーの動きから音楽表現の意図を読み取る方法は以下の通りである。

メロディーの上行　メロディーが高くなると盛り上がる。

メロディーの下行　メロディーが低くなると柔らかくなる。

メロディーの保留　同じ音が連続される時には次の効果が期待される。

（１）リズム重視

（２）停滞感

（３）しゃべっている

（４）（同音連続は特殊なケースのため）何が起こっているのだろう？と思わせる

上行下行の繰り返し　メロディーが上がったり下がったりする時は不安定を表す。

上行跳躍　メロディーが上行で大きく飛ぶときには気持ちの高ぶりが表現される。

最高音　フレーズ内（または楽曲内）の最高音で、もっとも強い意志を表現している。

リズムの学習

本授業で解説した、リズムの動きから音楽表現の意図を読み取る方法は以下の通りである。

左手の伴奏（刻み）　リズム感を出す。

左手の伴奏（アルペッジオ）　やわらかさを出す。

三連符・シンコペーション　強調させる。

音価の変化　音が長くなると強調、細かくなると焦りを表す。

楽曲の分析と演奏への反映への準備

学習の進め方

前項、「楽曲理解の進め方」の学習と同時進行で、学生は「小さな世界」「君をのせて」「BELIEVE」の３曲を授業内で歌い、自身の演奏したい楽曲を選曲した。その後は自身が選曲した楽曲に向き合い、メロディーとリズム、歌詞の内容から、楽曲全体やフレーズ、場面ごとに実施したい表現を考え、自身のレベルに応じた左手伴奏を導き出して演奏に反映させた。楽曲分析や演奏法に迷いが生じた際は教員に助言を求めることもあったが、それ以上に同じ楽曲を演奏する学生間で意見を交わし互いの演奏を聞かせあうことで、自身の演奏表現を言語化し、それぞれの個性を認め合う時間を持つようになった。

また、発表試験の前に実施した事前課題では、「選曲の理由」「目指したい表現」「この曲で一番大切にしたポイント」「保育者として子どもたちとの日常にどのように音楽を取り入れたいか」「２年間のピアノの授業の振り返り」[注1)] を回答してもらい、試験時にプログラムノートとして配布することで学生間の音楽表現の共有を促した。

なお、楽曲ごとの選曲人数は、「小さな世界」25人、「君をのせて」７人、「BELIEVE」９人であった。そのため最も選曲者の多かった「小さな世界」を例に楽曲分析と演奏への反映の経緯を追うことにする。[注2)]

左手伴奏譜の提示

左手の伴奏譜作成にあたり拍子を刻む際は各自の演奏技量に応じて、Lv.1～ Lv.3までの譜例を提示した。（図１）

Lv.1　コード指示に合わせてルート音のみ演奏。

Lv.2　オクターブで４拍子を刻む。（Lv.3の外枠になるため準備段階での練習にも使用可）

Lv.3　ポピュラーミュージックの左手奏法の形式で、主音と第５音を組み合わせる。

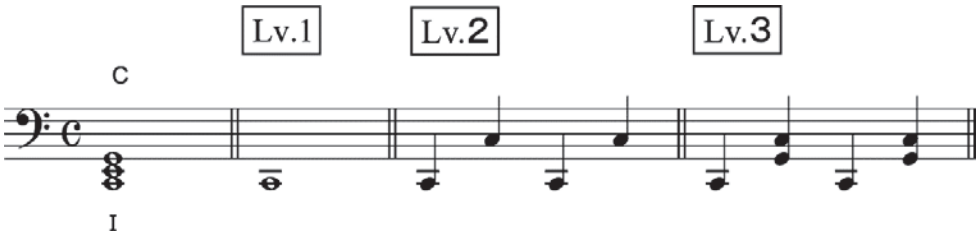


図１：左手奏法の例（コードＣの場合）

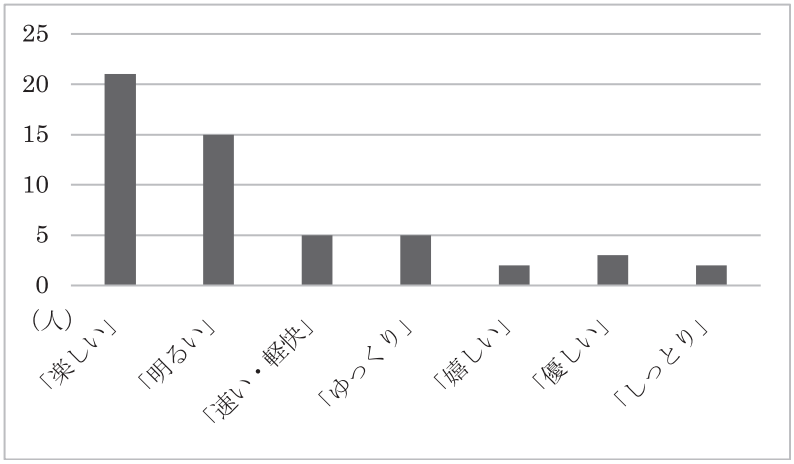
「小さな世界」の分析と演奏への反映

「小さな世界」の楽曲分析と演奏への反映経緯を、学生の事前学習アンケートの結果と共に追う。

選曲の理由　選曲の理由（自由記述）では、25人中８名が明るい曲やかわいらしい曲であること、６名がディズニー曲であることを挙げた。また、５名が子どもたちに親しまれている曲であることを挙げており、子どもたちに馴染みのある明るく楽しいディズニー曲であることが選曲理由であり、保育者として子どもたちの前で演奏する機会を想定して選曲したことが分かった。

目指したい表現　学生にとって表現の言語化は不慣れであるため、あらかじめ語群を設定し複数回答を求めたところ、表１の回答となった。

表１：目指したい表現

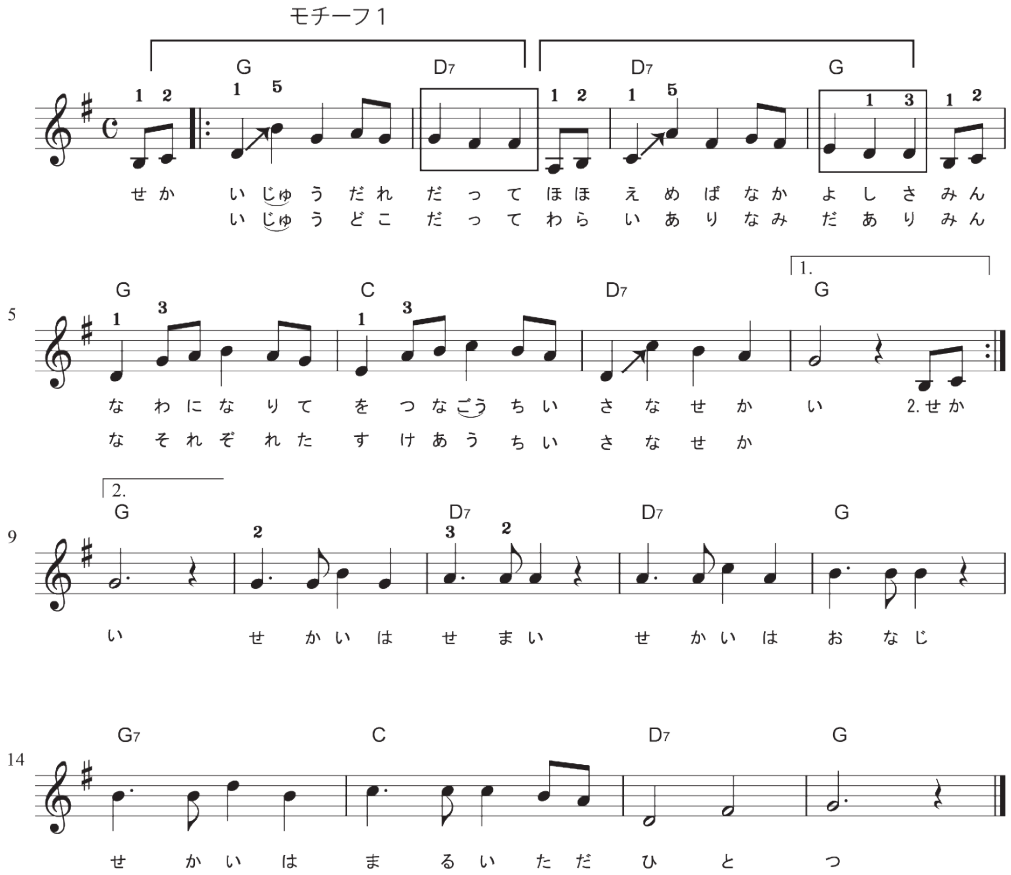


一般的には快活に演奏される「小さな世界」で「ゆっくり」や「しっとり」を選んだ学生が少数ながらいたが、これはピアノ演奏に苦手意識がある学生が自身の演奏技術を考え「ゆっくり」のテンポを選択したことに起因する。学生の中でも、当初は原曲の快活なイメージが先行していたが、実際に課題に取り組む中でゆっくりしたテンポで静かに演奏することで「おねむり」などの場面でも使用可能であることに気づく契機となった。

楽曲分析　前項、楽曲理解の進め方の「メロディーの学習」に基づき、選曲した楽曲のメロディーの動きを学生自身で確認した。その後、教員の助言や学生間での意見交換を通じて以下のようにまとめ、演奏への反映を目指した。

譜例１より、モチーフ１は冒頭のアウフタクトから１小節目第１音にかけて順次上行後、長６度の跳躍が行われる。その後、２小節目４拍目より、２度下で同じ動きが繰り返される。また、２小節目１～３拍目では、２～３拍目の四分音符による同音反復があることで、短いモチーフ１の終了感と共に、日本語の訳詞「だって」の促音便の効果もあり軽やかさを感じる動きになっている。これらの分析から、右手演奏時には跳躍の到達音では張りのある明るい音で演奏し、２小節目の

G-Fis-Fisでは軽やかさを求められることが分かった。その後、７小節目で短７度の跳躍を経て10小節目から始まる後半部分では、10～15小節冒頭の付点四分音符や16～17小節で見られる二分音符や付点二分音符など、前半部分に比べて長い音価が用いられることで楽曲の広がりが表現されている。



譜例１：「小さな世界」（指遣いは教員が記載した）[1)]

演奏への反映　「小さな世界」は３曲の課題曲の中で、もっとも短く技術的にも平易であることから、これまでLv.1またはLv.2の左手伴奏を選んできたピアノ演奏に苦手意識を持つ学生が取り組むこともあった。そのため前奏は２名を除き14～17小節をそのまま使うなど、技術的な派手さは見られなかった。しかし、演奏場面が子どもの歌伴奏だけではなく、リトミックや行事での入退場などで活用されることも想定し、前奏・１番・２番と演奏していく中で、演奏ポジションを１～２オクターブ上げ下げしたり、導入で左手の伴奏をアルペッジオまたは全音符のルート音の保持で演奏した後、サビや２番に入るタイミングで４ビートの刻みに変更するなど様々な工夫が見られた。

表２：この曲で一番大切にしたポイント

変化をつける	1回目は軽やかに2回目は元気いっぱいに演奏する
	1番：出だしは軽快に、サビでゆっくりする 2番：高い音でオルゴール調ではじめ、最後はミスを怖がらず力強く演奏する
	2回目を低くすることで曲の強さを出す
	2回目で音を下げて、落ち着いた感じにしつつ、サビでの盛り上がりを引き立てるようにする
	聴いている人がリラックスして楽しくなるように、出だしは丁寧に演奏し、サビの部分ではテンポや変化を楽しんでもらえるようにする
	1番のサビは滑らかに演奏する。その後1オクターブあげて弾く時に、少し音を小さくしてキラキラした感じを出す
	2番に入る際、音を高くし、盛り上がりを意識する
	冒頭は軽やかに弾き最後はテンポを上げ元気に演奏する
	出だしは楽しく明るく演奏し、途中で音を高くしてからはしっとり弾く
	途中で音を高くして可愛らしく弾き、最後は楽しくなるようにする
	サビは弾むように演奏する
	出だしはリズミカルに、サビは元気に演奏する
曲調の表現	楽しい気持ちが出るよう軽く跳ねるように演奏する
	ゆっくりのテンポに合うバランスで可愛く弾むように弾く
	子供が一緒に歌いたくなるような曲調を意識する
	可愛らしい曲なので全体的にゆったり優しくを意識して弾く
	明るい曲なので楽しく演奏する
	始まり部分が1番好きなので、そこを大切に演奏する
	出だしを明るく楽しく演奏する
	ゆったりとした状況や落ち着いた時に演奏することを想定する
テンポの意識	リズミカルに一定のテンポで演奏する
	テンポが速くならないように気を付けて演奏する
	自分のペースでゆっくり演奏する
	一定のテンポで全体的に明るさを大切にする
	全体的に一定のリズムで、聴く人の心が落ち着くように演奏する
	あえてゆっくり弾くことで、原曲とは異なる雰囲気を楽しんでもらう

事前課題アンケートより抜粋。（自由記述）

表２では、事前課題での「この曲で一番大切にしたポイント」の回答をまとめた。これにより、学生が考えた演奏上のポイントは大きく分けて３つに分類できることが分かった。１つめは曲の途中で変化を持たせることで表現の幅を広げること、２つめは曲調を表現するよう意識すること、３つめはテンポを意識することである。

さらに細かく分類していくと、１つめの「変化をつける」は、１番から２番またはサビに移るタイミングでの音高の変化が最も多く、表中には示されないものの、前述のとおり左手の伴奏系を変更することでも曲想の変化をつける試みがなされていた。

２つめの「曲調の表現」に関しては、到達したいイメージは持っているものの、具体的な奏法が

分からず教員の助言を必要とする場面が多くみられた。しかし、入学当初に実施した演奏の小テストでは、クラスの学生の前で「間違えたくない」という思いに支配されて極度に緊張していたことを考えると、曲調の表現を一番大切にしたいとする姿勢の変化に、２年間の成長が見て取れた。

３つめの「テンポの意識」は、最も基礎的な事項であると同時に楽曲全体を俯瞰する意味でも演奏表現にとって重要な事項である。しかしながら、緊張状態でテンポを維持して演奏することは困難を伴うことが多い。緊張状態でも、恐怖感に支配されずにテンポへの意識を強く持とうとする姿勢には、同じく２年間の成長を感じた。

保育者としての視点　事前課題「保育者として子どもたちとの日常にどのように音楽を取り入れたいか」では、自由記述で多岐にわたる意見が回答された。表３は、それらの回答を「ねらい」と「内容」の観点でまとめたものである。

表３：保育者として子どもたちとの日常にどのように音楽を取り入れたいか

ねらい（子どもの姿）	内容（音楽活動）
音楽で自分を表現できるようにする 音楽を身近に感じられるようにする 音楽で日々の生活を豊かにする①	歌を歌う、楽器を演奏する、リズム遊びをする
	音に合わせて子どもが自由に体を動かす
	何気ない日常の出来事や気持ちを音楽で表現する
	子ども達と一緒に歌詞を考えてオリジナルで歌を作る
	身近な材料を使って音遊びをする
音楽に触れることで気持ちを落ち着かせる	生活の歌など活動と活動の間に音楽を取り入れる
音楽に触れることで気分を向上させる	
音楽で生活のメリハリをつける	
音楽で日々の生活を豊かにする②	
音楽を通じて季節を味わう	季節の歌に触れる

事前課題アンケートより回答のまとめ。

表３からは、２年間の学習を通じて修得したピアノ演奏と音楽理解の知識を基に、保育者としての視点で、子どもたちとの日常に積極的に音楽を取り入れようとする意欲が読み取れる。入学時、ピアノのレッスンや音楽学習の経験には個人差が見られ、ピアノ学習自体に不安を感じる学生が多かったが、本課題を通じて保育者視点で音楽を捉えはじめたことが分かり、演奏表現と同様に学生の成長を感じさせる回答となった。

演奏披露と音楽体験の共有

最終授業回では、これまでの学習の総まとめとして、自身の考えた音楽表現をクラスメイトの前

で実技試験として披露し、音楽体験の共有を行った。演奏時は弾き歌いをする学生、ピアノ独奏の学生と様々ではあったが、自身の技術レベルに応じた音楽学習の成果を披露した。それにより、同じ曲であっても様々な解釈が可能であること、また１曲のレパートリーを持つことで、工夫次第で様々な場面で使用が可能となることに気づいた。さらに、左手伴奏の形式に関しても、Lv.1が必ずしも技術的に平易ではなく、音数が少ないからこそ倍音や音の質、響きなどのコントロールが必要であり、左手がシンプルであるが故にメロディーが引き立つ効果を持つことに学生自身が気づくことができた。演奏終了後には互いに健闘を称えあう姿が見られ、学生それぞれが自身の考えを持って演奏を披露し表現したことへの敬意と達成感が表されていた。

授業成果の考察

保育者養成校のピアノの授業において本課題を実施することで、受講学生は楽曲の求める表現を自身で考察し演奏に反映できるようになった。同時に、音楽表現において最も重要なことは音数の多い煌びやかな演奏ではなく、楽曲の求める表現を理解し表現方法を導き出すことにあると気づくことができた。そのことにより、ピアノ初級者であっても基礎的な演奏技術を身につけていれば子どもたちとの生活の中に臆することなく音楽表現を取り入れていけることに気づくことができた。

しかしながら、読譜に関して苦手意識を持つ学生が最後までいたことと、学習当初は動画サイトなどを通じて安易に煌びやかな演奏を模倣しようと試みた学生も少なからずいた。そのため基礎的なソルフェージュの訓練を短時間でもピアノの授業内で取り入れる工夫と、音楽表現に関しての固定概念の払拭を入学後の早い時期から開始する必要性を感じることとなった。保育者養成校における音楽表現指導の更なる可能性の探究と共に、今後の研究課題としたい。

引用文献

１）財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構（編）.（1963）. *母とおさなごの歌（第３版）*. pp.94：株式会社全音楽譜出版社.

注　釈

注１）「２年間のピアノの授業の振り返り」に関しては, 教員への個人的なメッセージも含まれていたため, 配布資料には掲載をしなかった。

注２）本授業の受講学年は２年生であるため, 入学時に実施したアンケートから受講者の総数が変動している。